

植物はエライ

大森 海太

今年は春先から気温が高めだったためか、街路樹などの生育が順調のようだ。先日も近所の通りを散歩していると、新緑の並木がいつもより大きく繁っているようで、五月の陽光にキラキラと輝いている。

でもその下をそこらへんの連中がスマホ片手に、難しそうな顔をしてせわしなく行ったり来たりしている。なんだか人間のほうが矮小なものに見えてしまう。

イヤ、植物はエライ。

そもそも植物は光合成によって自ら栄養（有機物）を作り出すので、独立栄養といわれる。これに対して動物にはその能力がないため、植物や他の動物を食べることによってエネルギーを摂らざるをえず（草食・肉食動物）、従属栄養と称される。

人間は食物連鎖の頂点などといって威張っているが、従属栄養の最たるものではないだろうか。

イヤ、植物のほうがエライ。

ところで我が家から歩いて二〜三分らしいの坂道に大きなムクの木がある。高さ三メートル、幹周五メートル、推定樹齢なんと四〇〇年と記した札が立っている。

四〇〇年前といえば十七世紀前半、我が国では大坂夏の陣が終って、二代将軍秀忠、三代将軍家光の時代である。

中国では明朝末期、満洲の女真が後金、大清国と称してあとをねらっていたころ。

欧州では三十年戦争の真っ最中、神聖ローマ帝国の権威が失墜するいっぽう、イングランドからは清教徒ピューリタンの一行がメイフラワー号に乗って新大陸をめざし、ロシアではロマノフ王朝が立ち上げられた。

そんなころ芽を出したムクの木は、江戸時代から明治大正を経て先の大戦では空襲で樹の上部をやられ幹の中は一部空洞になっているものの、毎年この季節には新しい葉が青々と生い茂って上空に拡がっている。

このような大木に比べれば、人間など果敢ないものだ。

終戦直前に生まれ、いまや年齢八十一を数える私など、あと何年この世に居られるか分かったものじゃないが、このムクの木はあと何十年、あるいは何百年、人の世を見まもり続けるのだろうか。

イヤ、つくづく植物はエライ。